

第 63 回

明治大学中央図書館企画展示

新収貴重書展



会場：明治大学中央図書館 1F ギャラリー

会期：2016年3月24日(木)～5月9日(月)

休館：3月31日(木)

新収貴重書展 出展リスト

展示番号	書名など	請求記号
1	菊水物語 5巻 / 永壽堂 [作]; 勝川春山画. -- [西村屋与八], [寛政10 (1798)]	913.57/EI1-1//H
2	江戸文藝文庫 戀渡操八橋 4巻 / 式亭小三馬作; 香蝶樓國貞画. -- 松原堂, 天保12(1841)	913.57/SH2-2//H
3	草紙合高評雙六 / 梅素亭玄魚稿; 一陽齋豊國画. -- 若狭屋与市, [江戸末期]	798/11//H
4	和貴重書 宗門取調帳: 元文四己未年. -- [金子彌十郎], 元文4(1739).	092.4/83//H
参考 展示	洋貴重書 クリスチャン・ポラックコレクションより、ステレオスコープ、明治期古写真等	
5	眼鏡 / 島崎藤村著. -- 實業之日本社, 大正2(1913). -- (愛子叢書; 第1篇).	MB100/SH17-22//W
6	色鳥 / 夏目漱石著. -- 新潮社, 大正4(1915).	MB100/NA36-37//W
7	左千夫歌集 / 伊藤左千夫著. -- 春陽堂, 大正9(1920). -- (左千夫全集; 第1巻).	MB100/IT3-3//W
8	青き魚を釣る人: 抒情小曲 / 室生犀星著. -- アルス, 大正12(1923).	MB100/MU8-43//W
9	父親 / 里見弴著. -- 玄文社, 大正12(1923).	MB100/SA25-44//W
10	日本近代文学 文庫 情婦殺し: 小説集 / シュニッツレル著; 山本有三譯. -- 新潮社, 大正15(1926).	MB100/YA9-12//W
11	菊五郎格子 / 子母沢寛著. -- 改造社, 昭和7(1932).	MB100/SH27-8//W
12	雅歌 / 横光利一著. -- 書物展望社, 昭和7(1932).	MB100/YO4-16//W
13	上海 / 横光利一著. -- 決定版. -- 書物展望社, 昭和10(1935).	MB100/YO4-17//W
14	新胎; 木石 / 舟橋聖一著. -- 青木書店, 昭和13(1938).	MB100/FU10-10//W
15	體操詩集 / 村野四郎著. -- アオイ書房, 昭和14(1939).	MB100/MU11-1//W
16	老(アルト)ハイデルベルヒ: 小説集 / 太宰治著. -- 竹村書房, 昭和17(1942).	MB100/DA1-10//W
17	[蝦夷地図] / [近藤重蔵原図]. -- [書写者不明], 19世紀.	AS10/70//H
18	[江戸・文政の大火]. -- [出版者不明], 文政12(1829).	AS36/325//H
19	[嘉永三年二月五日麴町の大火]. -- [出版者不明], 嘉永3(1850).	AS36/324//H
20	本志らべ大新板: 元治元年甲子京大火・文久三年大阪大火・天保八年大阪大火. -- [出版者不明], 19世紀.	AS60/13//H
21	人のうわさ: 伏見大火, さかい大火, 大坂御城. -- [出版者不明], 1860年代.	AS63/102//H

「新収貴重書展」の開催にあたり

明治大学図書館では、独自の収書基本方針に基づいて、教育・研究に有意義な資料を永年にわたり収集してまいりました。それらの中には、学術上貴重な図書や大型コレクションなど特別な資料もみられます。

たとえば、古地図の一大コレクションである「^{あしだ}蘆田文庫」、近世文学の洒落本・読本・草双紙類から成る「江戸文藝文庫」、近代日本文学の初版本などから成る「日本近代文学文庫」やその他の稀覯書をあげることができます。

これらのすでに特色あるコレクションを形成した分野は、更なる充実・発展が期待されています。

こうした新収資料は、ギャラリーで展示して一般に公開してまいりました。

江戸の庶民に親しまれた一陽齋豊國『草紙合高評雙六』や諸本、今も読み継がれる夏目漱石『色鳥』、太宰治『老(アルト)ハイデルベルヒ：小説集』などの諸作品、地図成立史研究上に有用な「蘆田文庫」新収蔵本をはじめ、珠玉の資料の数々を初公開いたします。

しばし、紙の本が醸し出す世界にふれ、質の高い文化の薫りの一端をお楽しみくだされば幸いに存じます。

明治大学図書館

江戸文藝文庫

1999年、本学文学部教授、故水野稔氏旧蔵書の一括購入を契機に創設された。

江戸時代後期の読本・合巻・人情本・洒落本・黄表紙・滑稽本などからなり、山東京伝『優曇華物語』初版本（文化元年）などがよく知られている。以後、これらの旧蔵書を核として、江戸後期の小説類やその関連資料を収集範囲に定め、図書館で毎年予算を計上してコレクションの拡充を図っている。

拡充の柱の一つが、元埼玉大学教授、故大久保忠国氏旧蔵「抱谷文庫」で、江戸時代の文芸および演劇関係の原本を多数収集していることで著名である。

図書館では、役者評判記・番付・せりふ本などの演劇関係資料、式亭三馬・山東京伝・山東京山・曲亭馬琴などの作品その他をまとめた草双紙類、狂言絵本類などジャンルごとに収集を継続している。

No.1 きくすいものがたり 菊水物語 5巻 / 永壽堂 [作]；勝川春山画

◆黄表紙。『菊水之巻』の書名でも刊行。作者は、巻5の巻末に「七十一才永壽堂」とあることから、江戸時代中期の版元で、戯作者でもある西村屋与八（初代）と思われる（『黄表紙総覧』より）。屋号は永壽堂。勝川春山は、江戸時代中期-後期の浮世絵師。天明-寛政(1781-1801)のころに役者絵、美人画などを描いた。

No.2 こいわたるみさおのやつはし 戀渡操八橋 4巻 / 式亭小三馬作；香蝶樓國貞画

◆合巻。式亭小三馬は、江戸時代後期の戯作(げさく)者で式亭三馬の子。江戸本町の家業の売薬店をつぐ。文政12年の「娘暦振袖初」をはじめとして、多くの合巻を発表した。挿絵は歌川國貞。

No.3 そうしあわせあたりすごろく 草紙合高評雙六 / 梅素亭玄魚稿；一陽齋豊國画

◆梅素亭玄魚（梅素玄魚ともいう、1817-1880）は幕末・明治時代の図案家。はじめ骨董商で働いていたが、経師であった父のもとめでかいた看板等の意匠が好評でのちにこれを専門とするようになった。一陽齋豊國は歌川豊國（三代目）の別号。本資料は72.0×72.2cmの大判の量物で、「倭文庫」「兎雷也豪傑譚」「弓張月」「犬のさうし（草紙）」など当時人気だったと思われる絵草子十四作を題材とした飛び双六である。各作品の登場人物がそれぞれ横三枚に配され、一つの場面を構成している。そのほか画面中央列上下段には合巻を見比べる女性達やカルタを取り合う貴公子と女性達などが色鮮やかに描かれている。

和貴重書

No. 4 宗門取調帳：元文四己未年.[金子彌十郎]

◆前後の元表紙を欠き「原題」は不明。記載内容は宗門人別改帳しゅうもんじんべつかいか帳の形式にのっとり、明治42年（1909）に追補された表紙にも「宗門取調帳」と書かれている。宗門人別改帳は、江戸時代、村ごとに作成して領主に提出した人口の基礎台帳である。寛文11年（1672）以降江戸幕府のキリシタン禁止政策とあいまち、制度上は人々を仏教徒（「旦那」、今の檀家）として登録した宗門人別改帳が毎年作成された。展示した部分には、越後国刈羽郡柏崎町かりわ（現、新潟県柏崎市）に住む七兵衛（53歳）と女房（46歳）、仁五兵衛（24歳）と女房（18歳）、三九郎（21歳）と女房（15歳）の三夫婦が一家として記されている。

クリスチャン・ポラックコレクション

クリスチャン・ポラック氏が蒐集した日仏交流史関係資料のコレクション。内容は図書以外にも、明治期の古写真、絵葉書、商標、ポスター、ビゴーの挿絵や絵画など多岐にわたる。2014年4月～6月に開催された神奈川県立歴史博物館『繭と鋼：神奈川とフランスの交流史』展には、このコレクションから多くの資料が出展された。

本展示にはコレクションの中から、ステレオスコープ（立体鏡）2基、ステレオ写真、古写真アルバムなどを展示した。

【参考資料】クリスチャン・ポラックコレクションより、ステレオスコープ、明治期古写真等

日本近代文学文庫

元予科長、小林秀穂教授の寄贈書（文学、哲学書100冊）をもとに、1947年「小林文庫」として設置。日本文学の授業で、薫り高い文学書初版本に触れさせたいという考えに基づいたと伝えられる。

1991年、元図書館長、故佐藤正彰文学部教授の旧蔵書を受け入れるにあたり、今の文庫名に改称した。コレクションは、明治から昭和戦前期までの文学書初版本を中心としている。

近年では、文学史上重要な作家については、戦後の作品であってもコレクションに加えている。

また、本学関係者の作品やその人となり伝える自筆もの（署名本、草稿、書幅等）も収集している。



No.5 眼鏡 / 島崎藤村著

◆ 島崎藤村は詩人、小説家。詩集『若菜集』を発表して、浪漫主義詩人として出発。小説『破戒』によって作家としての地位を確立、自然主義文学の先駆となる。『眼鏡』は、藤村が初めて書きおろした長編童話。「眼鏡」を主人公として、眼鏡を買った「旦那」のお供をする様子が描かれている。實業之日本社版「愛子叢書」の第一篇として発行された。大正11年に改定本が発行されたが、以後この作品は、全集その他藤村生前のあらゆる著書から除かれている。



No.6 色鳥 / 夏目漱石著

◆ 正岡子規宛の書簡「倫敦消息」ほか、『硝子戸の中』から6編など、小説の一部も収録した文集。巻末の「編者記」に「『色鳥』一卷は、夏目漱石先生の全作中から、その最も代表的なものを選び、是を歴史的に編纂したものである。本書を一読すれば、先生が作風の真髓に味到することが出来るであらう」とある。装幀・装画は画家の津田青楓。



No.7 左千夫歌集 / 伊藤左千夫著

◆左千夫は、明治～大正の歌人で小説家。上総国武射郡殿台村（現在の千葉県山武市殿台）で生まれ、18歳で政治家を志し明治法律学校に入学したが眼病のため学業を断念した。明治22（1889）年に牛乳搾取業を本所区茅場町（現在のJR錦糸町駅あたり）に開業。三十歳を過ぎて短歌を勉強し始め、37歳で34歳の子規に師事。子規の死後、その後を承けて優れた短歌や歌論を発表。明治41（1908）年に『阿羅々木』（のち『アララギ』へ改題）を創刊し、門下から島木赤彦、斎藤茂吉、土屋文明（のち本学文学部教授。文化勲章受章）など著名な歌人が輩出した。数十篇の小説も執筆し、明治39（1906）年に発表した「野菊の墓」は不朽の名作となった。『左千夫歌集』は、明治33（1900）年以降の作品から短歌1879首などを収録し、代表的短歌に「牛飼が歌詠む時に世の中のあらたしき歌大いに起る」がある。大正2（1913）年7月30日50歳で没。



No.8 青き魚を釣る人：抒情小曲 / 室生犀星著

◆室生犀星は石川県出身、大正-昭和の詩人・小説家。号は魚眠洞。

室生犀星の第一詩集は大正7（1918）年1月に刊行された「愛の詩集」である。その刊行から5年の後に第一詩集より前（1909-1911年頃）に作成された詩や小曲を纏めたという、刊行年代と創作年代が一致しない詩集であるが、その刊行動機については本資料の小言に室生犀星自身が語っている。

通例では函入だが、本書はカバー装で刊行されたもの。裏表紙の魚のマークや、表紙の灰青色の枠や題字は函入本と同じ。恩地幸四郎による装丁。



No.9 父親 / 里見弴著

◆短編小説第六集。表題作は大正9年6月に雑誌『人間』に発表した作品。上方の父娘話。著者の評価は「大阪放浪中の見聞を材料に調理して、やや満足のいく味を得た自慢の作」（『里見弴全集 第2巻』（筑摩書房）あとがきより）。テレビドラマ化もされた。



No.10 情婦殺し：小説集 / シュニッツレル著

◆シュニッツレル（1862～1931年）はオーストリアの小説家、劇作家。ウィーン大学で医学を学んだが文学の道歩んだ。本書の粗筋だが、若きアルフレットは法学と教会法の両方の学士で暢気に暮らしつつ、身寄りのない娘エリーゼと一年以上愛人関係を続けていた。舞踏会で工場主の令嬢アデーレが眼前に現われると、アルフレットはアデーレとの結婚を渴望するようになった。エリーゼにモルヒネを大量に服用させて毒殺に成功したものの、アデーレは別の男と婚約していた。エリーゼを思慕するドイツ人男爵とドナウ河畔で決闘する羽目になったアルフレットは、ピストルを見た瞬間、エリーゼがかつてないほど愛しく感じたのだった。訳者の山本有三（1887～1974年）は、栃木市生まれの劇作家、小説家。東京帝国大学独文科卒。代表作『路傍の石』はじめ数々の作品を執筆し、昭和初期、本学に在職。1947年参議院議員に当選、1965年文化勲章受章。





No.11 菊五郎格子 / 子母沢寛著

◆子母沢寛は小説家。明治大学法学部卒。新聞記者を経て、昭和3年『新撰組始末記』でデビュー。『弥太郎笠』『国定忠治』などの股旅物や『勝海舟』『父子鷹』『逃げ水』など、幕末維新期を主題にした作品で知られる。『菊五郎格子』は五百石の旗本滑川家の嫡男又四郎が、余儀ない事情で家を出たことから非常な運命に巻き込まれる話である。又四郎は武士だが、やくざの世界とも関係があり、作品中には多様な人物が書き分けられている。



No.12 雅歌 / 横光利一著

◆横光利一は福島県出身、大正-昭和の小説家。大正13年に川端康成・片岡鉄平らと「文芸時代」を創刊し、新感覚派運動の中心として活躍。また、新心理主義の作品をも試みた。

「雅歌」は昭和6(1931)年7月1日から8月19日にかけて報知新聞に50回にわたって連載された新聞小説である。有閑階級の若い男女の恋愛模様を軸として展開し、科学的物理的な描写を通して「心理」を描写しようとした。

装丁には当時画期的であった白樺の樹皮を素材とする「白樺装」を採用している。

No.13 上海 / 横光利一著

◆昭和3年上海に渡り、その見聞をもとに著者の最初の長編である『上海』を執筆した。本作ははじめ昭和3-6年に連作長編として発表されたが、本書の著者の序によると「今見ると、最も力を盡した作品であるので、そのままにしておくには捨て切れぬ愛着を感じ」、全面的に修正を行い決定版として本書が刊行された。



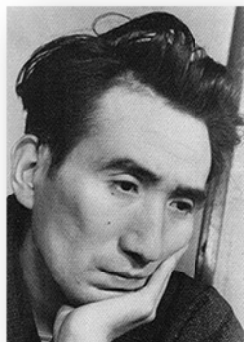
No.14 新胎；木石 / 舟橋聖一著

◆舟橋聖一は大正・昭和の小説家、劇作家。東京帝国大学在籍中に劇団心座を結成、大正10年、『新潮』に戯曲「白い腕」を発表して文壇にデビューしたが、次第に劇作家から小説家へ転身した。明治大学で教鞭をとるかたわら阿部知らと雑誌『行動』を創刊し行動主義を唱えたが、のちに行き詰まりを見せる。昭和13年に発表された「木石」は、医学士の二桐と助手の初、その娘・襟子の関係を軸に木石と揶揄される初の内に秘められた情念を描き、スランプ脱出のきっかけとなった作品とも言われる。戦後にかけては古典や伝統文化に造詣の深い独自の唯美的な作風を確立させた。



No.15 體操詩集 / 村野四郎著

◆詩人。兄は北原白秋門下の歌人の村野次郎。慶大卒業後理研コンツェルンに勤務。ドイツ近代詩の影響を受け、詩集『毘』でデビューした。『體操詩集』は、「鉄棒」、「体操」、「拳闘」などスポーツを題材にした詩に、レニ・リーフェンシュタールのベルリン・オリンピックの写真を組み合わせた、斬新かつ新鮮な感覚の詩集。構成はモダニズムの詩人・写真家でもある北園克衛。北園は序に「この詩集は稀有なスポーツ詩集であり、スポーツ写真集であると共に、またその何れにも属しない四つのディメンションを持った新しいタイプの詩集である」と書いている。



No.16 老(アルト)ハイデルベルヒ：小説集 / 太宰治著

◆太宰の作品集は多くの読者に待たれていたが、戦時下の紙不足のため品切れになってもすぐに再刊できなかった。苦肉の策として、2冊の作品集を新たに1冊の短編集として編んだのが、この「老(アルト)ハイデルベルヒ」であると序に書かれている。題名の下敷きとなった作品「アルト・ハイデルベルク」とは、ドイツの作家 W・マイヤー・フェルスターの戯曲で、日本でもたびたび上演された。美しい大学町ハイデルベルクを舞台にした皇太子カールとオーストリア娘ケーティとの悲恋物語である。太宰の短編は、若き日に美しき土地三島に滞在した時の思い出が語られている。そして8年後に再訪した時には・・・

この短編集は、その題名が示すように郷愁の匂いの強い作品のみを集めたという。二度ともどらない青春の美しさと悲しみを内包している。

蘆田文庫

1957年、歴史地理学者として著名な蘆田伊人^{あしたこれと}が生涯かけて収集した古地図コレクション約2000点を購入。内容は、世界図、北方図、日本図、地方図、町図、街道図、水路図、俯瞰図^{ふかん}など幅広い分野にわたる。日本図では、江戸時代初期の行基図^{ぎよきず}や国絵図^{くにえず}、元禄期の石川流宣^{いしかわのぶ}『本朝図鑑綱目』、江戸中期に民間図の主流をなした安永8年(1779)版の長久保赤水^{ながひさく}『日本輿地路程全図』、伊能図、明治期の地形図などが系統的に収集されており、日本地図成立史を知る上で有意義なコレクションとされている。

地方図には、当該地域ですでに失われてしまった貴重なものが含まれ、また世界図では、大黒屋光太夫が将来した両半球写図や、リッチ系の楕円形図などが所蔵されている。



No.17 蝦夷地図

◆寛政10年(1798)、近藤重蔵は幕府蝦夷視察の一員として初めて蝦夷地に行き、その後も3度にわたり江戸から蝦夷地を往復、エトロフ島、クナシリ島まで達する。本図は伊能忠敬の日本図以前の、北海道の輪郭を正確にとらえた地図である。原図は享和2年(1802)の成立で、樺太は島として描かれその上に紙を貼って半島として描かれているが、本図では半島を描く張り紙はない。「九臯庵」の書き込みがあるが、天明2年(1782)ロシアのラクスマン来航時の松前藩応接役を務め、後に『松前地図』を作成した加藤肩吾(1762-1822)が「九臯」と号していた。

No.18 江戸・文政の大火

◆文政の大火のかわら版。文政12年(1829)3月21日に、神田佐久間町河岸の材木小屋から出火し、折からの強い北風に煽られて一気に燃え広がり、日本橋、芝、京橋、新橋までを焼き尽くした文政の大火の様子を生々しく記した記事と、延焼した地域を示した地図から被害の甚大さがうかがえる。

本地図では火元の佐久間町「材木ヲキバ」を右上隅に配し、延焼した地域を描いている。

No.19 嘉永三年二月五日麴町の大火

◆麴町の大火のかわら版。嘉永3年（1850）2月5日に、麴町5丁目辺から出火し、激しい西北の風にあおられて芝一帯にまで燃え広がった。この瓦版では、麴町から芝増上寺周辺までの焼失状況を絵図で表すとともに、火災の状況が詳細に文字で記されており、被害を受けた多くの大名屋敷、旗本屋敷が列挙されている。

No.20 本志らべ大新板

◆元治元年（1864）7月19日に発生した京大火（どんどん焼け）、文久3年（1863）11月21日に発生した大阪大火（新町焼け）、天保8年（1837）2月19日に発生した大阪大火（大塩焼け）の三大火を併記したかわら版。それぞれの出火時の様子や延焼した地域、被害状況を記している。

No.21 人のうわさ

◆慶應4年（1868）正月の伏見、大阪での大火のかわら版。

慶應3年（1867）10月13日の大政奉還後の討幕派と公武合体派による朝議の紛糾、同年12月25日の幕府側の薩摩藩邸焼き討ちから、慶應4年1月3日の鳥羽伏見の戦いへと至り、武力対決の口火が切られた。本資料は、上下二段に分割し、さらに上段を三分割し下段を四分割して大坂、伏見の大火の様子を伝えている。日付や地域から、前出の政変に伴う戦火、火災であることは明白であるが、あくまでも大火のみを伝えている点が興味深い。

(おことわり)

解説文はさまざまな文献を参照して作成し、肖像は公共機関等がインターネット上に配信したデータを利用しました。記して謝意を表します。

**第 63 回 明治大学中央図書館企画展示
新収貴重書展**

編 集 : 中央図書館ギャラリー企画運営ワーキンググループ(WG)
(伊能秀明、鈴木秀子、平田さくら、飯塚貴子、桑原理恵、曾野正士、廣田理恵)

発 行 : 明 治 大 学 図 書 館

発行日 : 2016年3月24日